

令和5年度 九州大学2次試験前期日程(数学問題)150分  
理系(経済(経工), 理, 医, 歯, 薬, 工, 芸工, 農学部)

問題 1 2 3 4 5

1 以下の問いに答えよ。

- (1) 4次方程式  $x^4 - 2x^3 + 3x^2 - 2x + 1 = 0$  を解け。
- (2) 複素数平面上の  $\triangle ABC$  の頂点を表す複素数をそれぞれ  $\alpha, \beta, \gamma$  とする。

$$(\alpha - \beta)^4 + (\beta - \gamma)^4 + (\gamma - \alpha)^4 = 0$$

が成り立つとき,  $\triangle ABC$  はどのような三角形になるか答えよ。

2  $\alpha$  を実数とする。数列  $\{a_n\}$  が

$$a_1 = \alpha, \quad a_{n+1} = |a_n - 1| + a_n - 1 \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

で定められるとき, 以下の問いに答えよ。

- (1)  $\alpha \leq 1$  のとき, 数列  $\{a_n\}$  の収束, 発散を調べよ。
- (2)  $\alpha > 2$  のとき, 数列  $\{a_n\}$  の収束, 発散を調べよ。
- (3)  $1 < \alpha < \frac{3}{2}$  のとき, 数列  $\{a_n\}$  の収束, 発散を調べよ。
- (4)  $\frac{3}{2} \leq \alpha < 2$  のとき, 数列  $\{a_n\}$  の収束, 発散を調べよ。

**3** 点  $O$  を原点とする座標平面上の  $\vec{0}$  でない 2 つのベクトル

$$\vec{m} = (a, c), \quad \vec{n} = (b, d)$$

に対して、 $D = ad - bc$  とおく。座標平面上のベクトル  $\vec{q}$  に対して、次の条件を考える。

条件 I  $r\vec{m} + s\vec{n} = \vec{q}$  を満たす実数  $r, s$  が存在する。

条件 II  $r\vec{m} + s\vec{n} = \vec{q}$  を満たす整数  $r, s$  が存在する。

以下の問いに答えよ。

(1) 条件 I がすべての  $\vec{q}$  に対して成り立つとする。  $D \neq 0$  であることを示せ。

以下、 $D \neq 0$  とする。

(2) 座標平面上のベクトル  $\vec{v}, \vec{w}$  で

$$\vec{m} \cdot \vec{v} = \vec{n} \cdot \vec{w} = 1, \quad \vec{m} \cdot \vec{w} = \vec{n} \cdot \vec{v} = 0$$

を満たすものを求めよ。

(3) さらに  $a, b, c, d$  が整数であるとし、 $x$  成分と  $y$  成分がともに整数であるすべてのベクトル  $\vec{q}$  に対して条件 II が成り立つとする。  $D$  のとりうる値をすべて求めよ。

4 以下の文章を読んで後の問いに答えよ。

三角関数  $\cos x$ ,  $\sin x$  については加法定理が成立するが、逆に加法定理を満たす関数はどのようなものがあるだろうか。実数全体を定義域とする実数値関数  $f(x)$ ,  $g(x)$  が以下の条件を満たすとする。

(A) すべての  $x, y$  について  $f(x+y) = f(x)f(y) - g(x)g(y)$

(B) すべての  $x, y$  について  $g(x+y) = f(x)g(y) + g(x)f(y)$

(C)  $f(0) \neq 0$

(D)  $f(x)$ ,  $g(x)$  は  $x=0$  で微分可能で  $f'(0) = 0$ ,  $g'(0) = 1$

①条件 (A), (B), (C) から  $f(0) = 1$ ,  $g(0) = 0$  がわかる。以上のことから

② $f(x)$ ,  $g(x)$  はすべての  $x$  の値で微分可能で、 $f'(x) = -g(x)$ ,  $g'(x) = f(x)$  が成立することが示される。

③上のことから  $\{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x) = 1$  であることが、実部と虚部を調べることによりわかる。ただし  $i$  は虚数単位である。よって条件 (A), (B), (C), (D) を満たす関数は三角関数  $f(x) = \cos x$ ,  $g(x) = \sin x$  であることが示される。

さらに、 $a, b$  を実数で  $b \neq 0$  とする。このとき条件 (D) をより一般的な

(D)'  $f(x)$ ,  $g(x)$  は  $x=0$  で微分可能で  $f'(0) = a$ ,  $g'(0) = b$

におきかえて、条件 (A), (B), (C), (D)' を満たす  $f(x)$ ,  $g(x)$  はどのような関数になるか考えてみる。この場合でも、条件 (A), (B), (C) から  $f(0) = 1$ ,  $g(0) = 0$  が上と同様にわかる。ここで

$$p(x) = e^{-\frac{a}{b}x} f\left(\frac{x}{b}\right), \quad q(x) = e^{-\frac{a}{b}x} g\left(\frac{x}{b}\right)$$

とおくと、④条件 (A), (B), (C), (D) において、 $f(x)$  を  $p(x)$  に、 $g(x)$  を  $q(x)$  におきかえた条件が満たされる。すると前半の議論により、 $p(x)$ ,  $q(x)$  がまず求まり、このことを用いると  $f(x) = \boxed{\text{ア}}$ ,  $g(x) = \boxed{\text{イ}}$  が得られる。

- (1) 下線部 ① について,  $f(0) = 1$ ,  $g(0) = 0$  となることを示せ。
- (2) 下線部 ② について,  $f(x)$  がすべての  $x$  の値で微分可能な関数であり,  $f'(x) = -g(x)$  となることを示せ。
- (3) 下線部 ③ について, 下線部 ①, 下線部 ② の事実を用いることにより,  $\{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x) = 1$  となることを示せ。
- (4) 下線部 ④ について, 条件 (B), (D) において,  $f(x)$  を  $p(x)$  に,  $g(x)$  を  $q(x)$  に置き換えた条件が満たされることを示せ。つまり  $p(x)$  と  $q(x)$  が,
- (B) すべての  $x, y$  について  $q(x+y) = p(x)q(y) + q(x)p(y)$
- (D)  $p(x), q(x)$  は  $x = 0$  で微分可能で  $p'(0) = 0, q'(0) = 1$  を満たすことを示せ。空欄 ,  に入る関数を求めよ。

**5**  $xy$  平面上の曲線  $C$  を, 媒介変数  $t$  を用いて次のように定める。

$$x = t + 2 \sin^2 t, \quad y = t + \sin t \quad (0 < t < \pi)$$

以下の問いに答えよ。

- (1) 曲線  $C$  に接する直線のうち  $y$  軸と平行なものがいくつあるか求めよ。
- (2) 曲線  $C$  のうち  $y \leq x$  の領域にある部分と直線  $y = x$  で囲まれた図形の面積を求めよ。

## 解答例

$$\boxed{1} \quad (1) \quad (*) \quad x^4 - 2x^3 + 3x^2 - 2x + 1 = 0$$

$x = 0$  は方程式  $(*)$  の解ではないから,  $(*)$  の両辺を  $x^2$  で割ると

$$x^2 - 2x + 3 - \frac{2}{x} + \frac{1}{x^2} = 0 \quad \text{ゆえに} \quad \left(x + \frac{1}{x}\right)^2 - 2\left(x + \frac{1}{x}\right) + 1 = 0$$

$$\text{したがって} \quad \left(x + \frac{1}{x} - 1\right)^2 = 0 \quad \text{すなわち} \quad (x^2 - x + 1)^2 = 0$$

$$\text{これを解いて} \quad x = \frac{1 \pm \sqrt{3}i}{2}$$

$$(2) \quad (**) \quad (\alpha - \beta)^4 + (\beta - \gamma)^4 + (\gamma - \alpha)^4 = 0$$

$\alpha \neq \beta$  であるから,  $(**)$  の両辺を  $(\beta - \alpha)^4$  で割ると

$$1 + \left\{ \frac{(\beta - \alpha) - (\gamma - \alpha)}{\beta - \alpha} \right\}^4 + \left( \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} \right)^4 = 0$$

$$z = \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} \text{ とおくと} \quad 1 + (1 - z)^4 + z^4 = 0$$

$$\text{整理すると} \quad z^4 - 2z^3 + 3z^2 - 2z + 1 = 0$$

$$(1) \text{ の結果から, これを解くと} \quad z = \frac{1 \pm \sqrt{3}i}{2}$$

$$\text{したがって} \quad \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = \cos\left(\pm\frac{\pi}{3}\right) + i\sin\left(\pm\frac{\pi}{3}\right) \quad (\text{複号同順})$$

$$AB = AC, \quad \angle CAB = \frac{\pi}{3} \text{ より} \quad \triangle ABC \text{ は正三角形} \quad \blacksquare$$

$$\boxed{2} \quad a_1 = \alpha, \quad a_{n+1} = |a_n - 1| + a_n - 1 \text{ より } (n = 1, 2, 3, \dots)$$

$$\begin{aligned} a_{n+1} &= \max(a_n - 1, -a_n + 1) + a_n - 1 \\ &= \max(2(a_n - 1), 0) \end{aligned}$$

$k$  を自然数とすると、上の漸化式から

- (i)  $a_k \leq 1$  のとき,  $2(a_k - 1) \leq 0$  より,  $a_{k+1} = 0$
- (ii)  $a_k > 2$  のとき,  $2(a_k - 1) > 2$  より,  $a_{k+1} = 2(a_k - 1) > 2$
- (iii)  $1 < a_k < \frac{3}{2}$  のとき,  $0 < 2(a_k - 1) < 1$  より,  $0 < a_{k+1} < 1$
- (iv)  $\frac{3}{2} \leq a_k < 2$  のとき,  $1 < 2(a_k - 1) < 2$  より,  $a_{k+1} = 2(a_k - 1)$   
このとき,  $a_{k+1} - a_k = a_k - 2 < 0$  より  $a_{k+1} < a_k$

が成立する.

- (1)  $\alpha \leq 1$  のとき, (i) より  $a_2 = 0$   
順次, (i) を適用すると  $a_3 = 0, a_4 = 0, \dots$   
よって  $\{a_n\}$  は収束し,  $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$
- (2)  $\alpha > 2$  のとき, (ii) より  $a_{n+1} = 2(a_n - 1)$   
ゆえに  $a_{n+1} - 2 = 2(a_n - 2)$  すなわち  $a_n = 2 + (\alpha - 2) \cdot 2^{n-1}$   
よって  $\{a_n\}$  は発散し,  $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \infty$
- (3)  $1 < \alpha < \frac{3}{2}$  のとき, (iii) より  $0 < a_2 < 1$   
さらに, (i) を順次適用すると  $a_3 = 0, a_4 = 0, \dots$   
よって  $\{a_n\}$  は収束し,  $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$
- (4)  $\frac{3}{2} \leq \alpha < 2$  のとき, すべての自然数  $n$  について

$$\frac{3}{2} \leq a_n < 2$$

であると仮定すると, (iv) より  $a_{n+1} = 2(a_n - 1)$

$$a_n = 2 + (\alpha - 2) \cdot 2^{n-1}$$

このとき, 十分大きな  $k$  に対して,  $a_k < \frac{3}{2}$  となり, 仮定に反する.

よって,  $a_k < \frac{3}{2}$  となる整数  $k$  が存在するので, (i), (iii) より

$$\{a_n\} \text{ は収束し, } \lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$$



**3** (1)  $\vec{m} = (a, c)$ ,  $\vec{n} = (b, d)$  より ( $\vec{m} \neq \vec{0}$ ,  $\vec{n} \neq \vec{0}$ )

$$(*) \begin{cases} d\vec{m} - c\vec{n} = (ad - bc, 0) = (D, 0) \\ -b\vec{m} + a\vec{n} = (0, ad - bc) = (0, D) \end{cases}$$

$D = 0$  のとき  $d\vec{m} = c\vec{n}$ ,  $b\vec{m} = a\vec{n}$  ゆえに  $\vec{m} // \vec{n}$

このとき,  $\vec{m}$ ,  $\vec{n}$  は 1 次従属であるから,  $\vec{q}$  がこれらのベクトルと平行でないならば, 条件 I

$$r\vec{m} + s\vec{n} = \vec{q}$$

を満たす実数  $r, s$  は存在しない.

$D \neq 0$  のとき, 基本ベクトル  $\vec{e}_1 = (1, 0)$ ,  $\vec{e}_2 = (0, 1)$  は, (\*) より

$$\vec{e}_1 = (1, 0) = \frac{d\vec{m} - c\vec{n}}{D}, \quad \vec{e}_2 = (0, 1) = \frac{-b\vec{m} + a\vec{n}}{D} \quad (**)$$

のように, これらの基本ベクトルは  $\vec{m}$ ,  $\vec{n}$  の線形結合で表される.

したがって, 任意のベクトル  $\vec{q} = (x, y)$  を

$$(x, y) = x(1, 0) + y(0, 1) = x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2 \quad (***)$$

とすると,  $\vec{q}$  は  $\vec{m}$ ,  $\vec{n}$  の線形結合で表される.

よって,  $D \neq 0$  のとき, 条件 I を満たす実数  $r, s$  が存在する. [証終]

(2) (\*\*) の基本ベクトルと  $\vec{v}$  の内積をとると

$$\begin{aligned} \vec{e}_1 \cdot \vec{v} &= \frac{(d\vec{m} - c\vec{n}) \cdot \vec{v}}{D} = \frac{d\vec{m} \cdot \vec{v} - c\vec{n} \cdot \vec{v}}{D} = \frac{d}{D} \\ \vec{e}_2 \cdot \vec{v} &= \frac{(-b\vec{m} + a\vec{n}) \cdot \vec{v}}{D} = \frac{-b\vec{m} \cdot \vec{v} + a\vec{n} \cdot \vec{v}}{D} = -\frac{b}{D} \end{aligned}$$

$$\text{よって} \quad \vec{v} = (\vec{v} \cdot \vec{e}_1)\vec{e}_1 + (\vec{v} \cdot \vec{e}_2)\vec{e}_2 = \frac{1}{D}(\mathbf{d}, -\mathbf{b})$$

同様に, (\*\*) の基本ベクトルと  $\vec{w}$  の内積をとると

$$\begin{aligned} \vec{e}_1 \cdot \vec{w} &= \frac{(d\vec{m} - c\vec{n}) \cdot \vec{w}}{D} = \frac{d\vec{m} \cdot \vec{w} - c\vec{n} \cdot \vec{w}}{D} = -\frac{c}{D} \\ \vec{e}_2 \cdot \vec{w} &= \frac{(-b\vec{m} + a\vec{n}) \cdot \vec{w}}{D} = \frac{-b\vec{m} \cdot \vec{w} + a\vec{n} \cdot \vec{w}}{D} = \frac{a}{D} \end{aligned}$$

$$\text{よって} \quad \vec{w} = (\vec{w} \cdot \vec{e}_1)\vec{e}_1 + (\vec{w} \cdot \vec{e}_2)\vec{e}_2 = \frac{1}{D}(-\mathbf{c}, \mathbf{a})$$

(3) (\*\*) を (\*\*\*) に代入すると

$$\begin{aligned}\vec{q} &= x \left( \frac{d\vec{m} - c\vec{n}}{D} \right) + y \left( \frac{-b\vec{m} + a\vec{n}}{D} \right) \\ &= \frac{dx - by}{D} \vec{m} + \frac{-cx + ay}{D} \vec{n}\end{aligned}\tag{A}$$

条件 II を満たすとき,  $\frac{dx - by}{D}$ ,  $\frac{-cx + ay}{D}$  が整数である. とくに

$$\vec{q} = (1, 0) \text{ のとき} \quad \vec{q} = \frac{d}{D} \vec{m} - \frac{c}{D} \vec{n}$$

$$\vec{q} = (0, 1) \text{ のとき} \quad \vec{q} = -\frac{b}{D} \vec{m} + \frac{a}{D} \vec{n}$$

上の 2 式から,  $\frac{a}{D}$ ,  $\frac{b}{D}$ ,  $\frac{c}{D}$ ,  $\frac{d}{D}$  は整数である.

$$\frac{a}{D} \cdot \frac{d}{D} - \frac{b}{D} \cdot \frac{c}{D} = \frac{ad - bc}{D^2} = \frac{1}{D}$$

は整数であるから  $D = \pm 1$

逆に,  $D = \pm 1$  のとき, (A) より, 条件 II を満たす.

したがって  $D = \pm 1$  ■



4 (1) 条件式 (A), (B) に  $x = y = 0$  を代入すると

$$f(0) = f(0)^2 - g(0)^2, \quad g(0) = 2f(0)g(0) \quad (*)$$

上の第2式から  $\{2f(0) - 1\}g(0) = 0$

したがって  $f(0) = \frac{1}{2}$  または  $g(0) = 0$

- $f(0) = \frac{1}{2}$  のとき, (\*) の第1式に代入して整理すると  $g(0)^2 = -\frac{1}{4}$   
 $g(0)$  は実数値であるから,  $f(0) = \frac{1}{2}$  は不適.
- $g(0) = 0$  のとき, これを (\*) の第1式に代入して整理すると

$$f(0)\{f(0) - 1\} = 0 \quad f(0) \neq 0 \text{ に注意して } f(0) = 1$$

よって, 題意は成立する.

(2) (1) の結論および条件 (A), (D) より

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x)f(h) - g(x)g(h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \left\{ f(x) \cdot \frac{f(h) - f(0)}{h} - g(x) \cdot \frac{g(h) - g(0)}{h} \right\} \\ &= f(x)f'(0) - g(x)g'(0) \\ &= f(x) \cdot 0 - g(x) \cdot 1 = -g(x) \end{aligned} \quad (**)$$

(3) (2) と同様に, (1) の結論および条件 (B), (D) より

$$\begin{aligned} g'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{g(x+h) - g(x)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x)g(h) + g(x)f(h) - g(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \left\{ f(x) \cdot \frac{g(h) - g(0)}{h} + g(x) \cdot \frac{f(h) - f(0)}{h} \right\} \\ &= f(x)g'(0) + g(x)f'(0) \\ &= f(x) \cdot 1 + g(x) \cdot 0 = f(x) \end{aligned} \quad (***)$$

$\pi(x) = \{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x)$  とおくと, (2) および上式から

$$\begin{aligned} \pi'(x) &= \{f(x) + ig(x)\}'(\cos x - i \sin x) + \{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x)' \\ &= \{f'(x) + ig'(x)\}(\cos x - i \sin x) + \{f(x) + ig(x)\}(-\sin x - i \cos x) \\ &= \{-g(x) + if(x)\}(\cos x - i \sin x) - i\{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x) \\ &= i\{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x) - i\{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x) = 0 \end{aligned}$$

$\pi(x)$  は定数関数であるから  $\pi(x) = \pi(0) = \{f(0) + ig(0)\} \cdot 1 = 1$

よって  $\{f(x) + ig(x)\}(\cos x - i \sin x) = 1$

- (4) (3) の結論から  $f(x) + ig(x) = \cos x + i \sin x$   
 $f(x), g(x)$  は実関数 (実数値関数) であるから

$$f(x) = \cos x, \quad g(x) = \sin x$$

ここで,  $\varphi(x) = f(x) + ig(x)$  とおくと

$$\varphi'(x) = f'(x) + ig'(x) = -g(x) + if(x) = i\{f(x) + ig(x)\} = i\varphi(x)$$

$\varphi(0) = \cos 0 + i \sin 0 = 1$  および上式を満たす  $\varphi(x)$  を求める.

$$\varphi'(x)e^{-ix} - i\varphi(x)e^{-ix} = 0 \quad \text{ゆえに} \quad \{\varphi(x)e^{-ix}\}' = 0$$

したがって  $\varphi(x)e^{-ix} = C$  ( $C$  は積分定数) ゆえに  $\varphi(x) = Ce^{ix}$

$\varphi(0) = 1$  より  $C = 1$  すなわち  $\varphi(x) = e^{ix}$

$\varphi(x) = f(x) + ig(x) = \cos x + i \sin x$  であるから

$$e^{ix} = \cos x + i \sin x \quad (\#)$$

(#) により, 条件 (A), (B), (C), (D') を満たす関数  $f(x), g(x)$  を求める.  
 (D') を (\*\*), (\*\*\*) に代入すると

$$f'(x) = af(x) - bg(x), \quad g'(x) = bf(x) + ag(x)$$

$\phi(x) = f(x) + ig(x)$  とおくと

$$\begin{aligned} \phi'(x) &= f'(x) + ig'(x) = \{af(x) - bg(x)\} + i\{bf(x) + ag(x)\} \\ &= (a + bi)\{f(x) + ig(x)\} = (a + bi)\phi(x) \end{aligned}$$

$\phi(0) = f(0) + ig(0) = 1 + i \cdot 0 = 1$  および上式を満たす  $\phi(x)$  を求める.

$$\phi'(x)e^{-(a+bi)x} - (a+bi)\phi(x)e^{-(a+bi)x} = 0 \quad \text{ゆえに} \quad \{\phi(x)e^{-(a+bi)x}\}' = 0$$

したがって

$$\phi(x)e^{-(a+bi)x} = C_0 \quad (C_0 \text{ は積分定数}) \quad \text{ゆえに} \quad \phi(x) = C_0 e^{(a+bi)x}$$

$\phi(0) = 1$  より  $C_0 = 1$  すなわち  $\phi(x) = e^{(a+bi)x}$

(#) より  $\phi(x) = e^{ax} e^{ibx} = e^{ax} (\cos bx + i \sin bx)$

$\phi(x) = f(x) + ig(x)$  であるから ( $f(x), g(x)$  は実関数)

$$\mathbf{f(x) = e^{ax} \cos bx, \quad g(x) = e^{ax} \sin bx}$$

$$\text{これから } f\left(\frac{x}{b}\right) = e^{\frac{a}{b}x} \cos x, \quad g\left(\frac{x}{b}\right) = e^{\frac{a}{b}x} \sin x$$

これらを  $p(x) = e^{-\frac{a}{b}x} f\left(\frac{x}{b}\right)$ ,  $q(x) = e^{-\frac{a}{b}x} g\left(\frac{x}{b}\right)$  に代入すると

$$p(x) = \cos x, \quad q(x) = \sin x$$

[B の証明] このとき, 加法定理を用いて

$$\begin{aligned} q(x+y) &= \sin(x+y) = \sin x \cos y + \cos x \sin y \\ &= q(x)p(y) + p(x)q(y) = p(x)q(y) + q(x)p(y) \end{aligned}$$

[D の証明]  $p'(x) = -\sin x$ ,  $q'(x) = \cos x$  より

$$p'(0) = 0, \quad q'(0) = 1$$

[証終]

補足 本題の線形の連立微分方程式

$$\begin{aligned} f(0) &= 1, \quad g(0) = 0, \quad f'(0) = a, \quad g'(0) = b, \\ f'(x) &= af(x) - bg(x), \quad g'(x) = bf(x) + ag(x) \end{aligned}$$

から  $g(x)$ ,  $g'(x)$  を消去して, 2 階の微分方程式

$$f(0) = 1, \quad f'(0) = a, \quad f''(x) - 2af'(x) + (a^2 + b^2)f(x) = 0$$

を解いてもよい. 特性方程式  $X^2 - 2aX + a^2 + b^2 = 0$  の解を

$$\alpha = a + bi, \quad \beta = a - bi$$

とおくと  $f(x) = C_1 e^{\alpha x} + C_2 e^{\beta x}$  ( $C_1, C_2$  は積分定数)<sup>1</sup>

このとき,  $f(0) = 1$ ,  $f'(0) = a$  より

$$C_1 + C_2 = 1, \quad \alpha C_1 + \beta C_2 = a$$

上の第 2 式について  $\frac{\alpha + \beta}{2}(C_1 + C_2) + \frac{\alpha - \beta}{2}(C_1 - C_2) = a$

$\frac{\alpha + \beta}{2} = a$ ,  $\frac{\alpha - \beta}{2} = bi$  を代入すると  $a(C_1 + C_2) + bi(C_1 - C_2) = a$

$C_1 + C_2 = 1$ ,  $b \neq 0$  より  $C_1 = C_2 = \frac{1}{2}$  よって  $f(x) = e^{ax} \cos bx$

同様に, 2 階の微分方程式

$$g(0) = 0, \quad g'(0) = b, \quad g''(x) - 2ag'(x) + (a^2 + b^2)g(x) = 0$$

を解くと,  $g(x) = e^{ax} \sin bx$  を得る. ■

<sup>1</sup>[http://kumamoto.s12.xrea.com/kyusuu/oita/oita\\_2010.pdf](http://kumamoto.s12.xrea.com/kyusuu/oita/oita_2010.pdf) (p.17 例 2)

- 5 (1)  $C : (x, y) = (f(t), g(t)) = (t + 2\sin^2 t, t + \sin t)$  とおくと ( $0 < t < \pi$ )  
 $f'(t) = 0$  とすると  $1 + 4\sin t \cos t = 0$

$$1 + 2\sin 2t = 0 \quad (0 < t < \pi) \quad \text{ゆえに} \quad t = \frac{7}{12}\pi, \frac{11}{12}\pi$$

$$\begin{aligned} \text{このとき} \quad f\left(\frac{7\pi}{12}\right) &= \frac{7\pi}{12} + 1 - \cos \frac{7\pi}{6} = \frac{7\pi}{12} + 1 + \frac{\sqrt{3}}{2} \\ f\left(\frac{11\pi}{12}\right) &= \frac{11\pi}{12} + 1 - \cos \frac{11\pi}{6} = \frac{11\pi}{12} + 1 - \frac{\sqrt{3}}{2} \end{aligned}$$

したがって,  $C$  の  $t = \frac{7\pi}{12}, \frac{11\pi}{12}$  における 2 接線

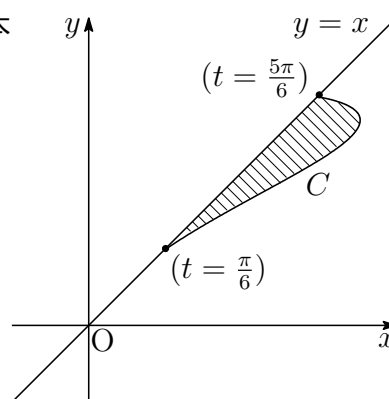
$$x = f\left(\frac{7\pi}{12}\right), \quad x = f\left(\frac{11\pi}{12}\right)$$

が異なるから, 求める接線の本数は 2 本

- (2) 求める面積を右の図の斜線部分である.  
 この面積を  $S$  とすると, ガウス・グリーンの定理により

$$S = \frac{1}{2} \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} \{f(t)g'(t) - f'(t)g(t)\} dt$$

このとき



$$\begin{aligned} f(t)g'(t) - f'(t)g(t) &= (t + 2\sin^2 t)(1 + \cos t) - (1 + 4\sin t \cos t)(t + \sin t) \\ &= t(\cos t - 4\sin t \cos t) + 2\sin^2 t - \sin t - 2\sin^2 t \cos t \\ &= t(\sin t - 2\sin^2 t)' + 2\sin^2 t - \sin t - 2\sin^2 t \cos t \\ &= \{t(\sin t - 2\sin^2 t)\}' + 2(2\sin^2 t - \sin t) - \frac{2}{3}(\sin^3 t)' \end{aligned}$$

よって<sup>2</sup>

$$\begin{aligned} S &= \frac{1}{2} \left[ t(\sin t - 2\sin^2 t) \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} + \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} (2\sin^2 t - \sin t) dt - \frac{1}{3} \left[ \sin^3 t \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} \\ &= \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} (1 - \cos 2t - \sin t) dt = \left[ t - \frac{1}{2} \sin 2t + \cos t \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} = \frac{2}{3}\pi - \frac{\sqrt{3}}{2} \end{aligned}$$

<sup>2</sup>[http://kumamoto.s12.xrea.com/nyusi/Qdai\\_ri\\_2022.pdf](http://kumamoto.s12.xrea.com/nyusi/Qdai_ri_2022.pdf) 5

別解  $\frac{\pi}{6} \leq t \leq \frac{5\pi}{6}$  で  $y = g(t)$  は単調増加であることに注意して

$$\begin{aligned} S &= \int_{g(\frac{\pi}{6})}^{g(\frac{5\pi}{6})} (x - y) dy = \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} f(t)g'(t) dt - \left[ \frac{y^2}{2} \right]_{g(\frac{\pi}{6})}^{g(\frac{5\pi}{6})} \\ &= \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} f(t)g'(t) dt - \frac{1}{2} \left\{ g\left(\frac{5\pi}{6}\right)^2 - g\left(\frac{\pi}{6}\right)^2 \right\} \quad \dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

$f\left(\frac{\pi}{6}\right) = g\left(\frac{\pi}{6}\right)$ ,  $f\left(\frac{5\pi}{6}\right) = g\left(\frac{5\pi}{6}\right)$  に注意して変形すると

$$\begin{aligned} S &= \left[ f(t)g(t) \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} - \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} f'(t)g(t) dt - \frac{1}{2} \left\{ g\left(\frac{5\pi}{6}\right)^2 - g\left(\frac{\pi}{6}\right)^2 \right\} \\ &= - \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} f'(t)g(t) dt + \frac{1}{2} \left\{ g\left(\frac{5\pi}{6}\right)^2 - g\left(\frac{\pi}{6}\right)^2 \right\} \quad \dots \textcircled{2} \end{aligned}$$

①, ②の辺々を加えることにより, 次式を得る.

$$S = \frac{1}{2} \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} \{f(t)g'(t) - f'(t)g(t)\} dt$$

$g\left(\frac{\pi}{6}\right) = \frac{\pi}{6} + \frac{1}{2}$ ,  $g\left(\frac{5\pi}{6}\right) = \frac{5\pi}{6} + \frac{1}{2}$  であるから, ①より

$$\begin{aligned} S &= \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} (t + 2\sin^2 t)(1 + \cos t) dt - \frac{1}{2} \left\{ g\left(\frac{5\pi}{6}\right)^2 - g\left(\frac{\pi}{6}\right)^2 \right\} \\ &= \int_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} (t + t\cos t + 2\sin^2 t + 2\sin^2 t\cos t) dt - \frac{\pi}{3}(\pi + 1) \\ &= \left[ \frac{t^2}{2} + t\sin t + \cos t + t - \frac{1}{2}\sin 2t + \frac{2}{3}\sin^3 t \right]_{\frac{\pi}{6}}^{\frac{5\pi}{6}} - \frac{\pi}{3}(\pi + 1) \\ &= \frac{2}{3}\pi - \frac{\sqrt{3}}{2} \end{aligned}$$

■